

市民の声

音訳者やおはなし会ボランティアとして活動しているお二人の市民の方の声を紹介します。

音訳と私

新井 浩子

ボランティアと聞くと、奉仕とか善意のイメージがある。だが私は極めて自己中心的な理由、介護で社会から隔絶されたような状況から気分転換したいという不埒な考えで始めた。

だから講習が始まると毎回自己嫌悪、頭では読めるのに実際は全く出来ない。人前で読む、この年になっていい恥さらしだ。講習の日は朝から憂うつである。しかし途中で投げ出す勇氣も無く、なし崩しに研修(実際の広報を録音)へ突入。ここでも機械操作やマニュアルなど、おぼちゃん(おぼちゃん)の頭はフリーズ状態だ。先輩方に赤子のように手取り足取り教えていただき、尻拭いまで押し付けてようやく一日がかりの録音が終わる。疲れきった体を引きずり帰宅、抜け殻となった母はレトルトカレーを息子たちと与え、早々にソファで沈没なことになる。だから人生何年ぶりの修了証をいただいた時は「自分良くがんばった!」と褒めてやりた

い気分だった。

ここから晴れて図書館協力員として登録して活動だ。一年くらいはお礼奉公と思ひ登録すると、同期の登録者が少ない!正直この時は一年たつたら逃げようと思った。

そんな私がなぜ今も続けているかというと、結局この大変さが楽しいからだろう。くじけていても良い先輩がたに恵まれ、同期に励まされる。いろいろな人の音訳に対する考え方や技術を傍で見ている、ああいうふうに読みたいと思う。耳で聞いて心に入る言葉の豊かさ、美しさ、表やグラフ、果ては漫画まで読みこなす姿をみて、ため息をついているだけではダメなのだ。できない自分を認め、学ぶこと、調べることが楽しいとようやく最近思えるようになった。

もちろん活動は時間的にもかなり大変だし、自己嫌悪の殻から抜けられないことも度々(いやほとんど)だ。それでももうちょっとやってみようと思える間は続けられる。やつぱり私にとって音訳とは人のためになることではなく自分の楽しみなのだと思う。

子どもと一緒に
絵本を楽しみなながら

鈴木 綾

図書館ボランティア養成講座を受け、おはなし会ボランティアを始め

て丸二年が経ちました。

一緒に講座を受講したお仲間には小学校等での読み聞かせ経験者も、全く経験のない方もおられました。西東京市の図書館で読み聞かせするのは皆初めて、講座をとおして図書館で読み聞かせをすることの意味とともに考える機会をいただいたのは大事な節目だったと思います。

ボランティアを始めると、複数の、年齢も性別もバラバラ、ほとんど初対面の子どもたちに本の楽しさを届けるには、何より選書が大切となりました。おはなし会に来る子どもたちを三才から五才と想定していても、未就園児が多い日は別の本にする必要がありますし、リピーターになって来てくれる年長児からは「もっと長い本読んで!」とリクエストもあります。来てくれた子どもたちがどれか一冊は楽しかったと思ってくれたらうれしいですが、複数の本を選んであつてもその日の「お客様」にちょうどよい本は、なかなかありません。そんなこともあり、ボランティア有志で『どんぐりの会』という交流会を年に三回ほどしています。会の開催に合わせて各館で読んだ本のリストを作り、子どもたちの様子や本の情報交換をするのはとても楽しく励みになっています。

今年の春にはフォロワーアップ講座で子どもたちの発達に沿った本選

について伺いました。実際の絵本を手に取りながら何才の子どもたちに届けたい本か、グループで考えあい、講師のお話を聞いたことは刺激的でした。古典として読み継がれてきた本のよさを改めて感じ、図書館でこそ、上手に子どもたちに紹介していきたいなと思いました。ボランティアは自発的にすることだからこそ、責任があると講座の中で確認されたことを忘れずに、微力ですが、これからも図書館と協力して子どもたちと一緒に本を楽しむ場を作っていきたいと思えます。

編集後記



もう二十五年も前の話です。自宅を改良した治療院で、盲目の医師と対面しました。私の顔の輪郭を指でなぞり、「このタイプは君の声だね。ちょっと風邪をひいていないかな。でも、しっかり読んでいる。これならどこへ出しても大丈夫だね」という医師の声は、私が抱いていた緊張感を吹き飛ばしました。自分の声が人の役に立っているという充実感、新鮮であり、驚きと喜びの経験でした。私のボランティア体験の出発点はこの医師との出会いにあるといえます。そんな私が今、図書館職員として、音訳者、点訳者の方々とサービスの向上を目指しています。